



繪本漢楚軍談

六

~ 13  
3565  
6





門 13  
號 3565  
卷 6

新編繪本漢楚軍談初輯卷之六

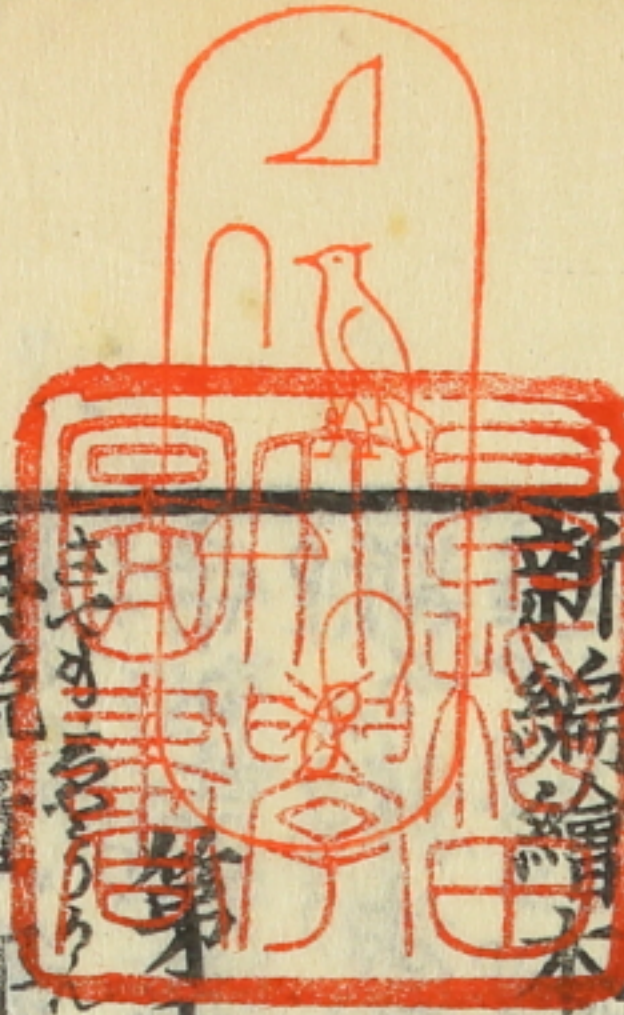
東都

鶴鶴貞高纂述

第十三回 秦諸將得陳餘書降楚

再說章邯の陣中。帝都の沙汰。敬馬。如何の做人と種々小評  
義一交不為所勅使の下向有り。互に面を看合。先其勅書。義  
了後。心を交さ。諸將一同。立上。急に勅使を出迎。各左右。拜伏。  
謹で詔を聞奉。勅書曰

征討之命出於天子。闔外之奇。實主於元。我建豎切。勲威  
振海內。必克乃濟。廢付委託。尔章邯等。統兵征伐。喪師辱  
命。差官奏事。未有明降。乃敢輒回。上下之分。殊為叛背。今  
差騎將趙常。往拘繫頸。來見順命。不違。尚有酌處。如復



早稲田 大學 図書館  
昭和 34.6.3 購  
蔵 書



矯抗罪不容誅惟詔奉行

如斯詔と聞よるも章邯以下の諸大将一度も忽ち立上り怒りの面色  
眼血をり趙常を蹴倒せ章邯へ踊り懸つて趙常の影を撮捨伏て  
這を白眼て曰けり奈何の趙常養の我輩既の身命を輕し親ら矢  
石を冒し万死一生の戦し七限りものぬ辛苦を凌ぎ諸城に向つて大功を  
謀り楚の軍勢と九度最も辛痛く戦ふ十日餘り晝夜とも睡る事  
爲さざりしを況て兵糧秣も盡て味方の士卒道路の倒人馬疲て敵の  
對ひ戦ふ氣力も無故に追々馬を馳せし事由を奏せん趙高隠し  
帝の告知を却て我輩を罪せんと謀り奸惡非道汝も亦人情の理を不知  
斯る苛法の書と携へて勅命を唱ゆる面憎き故に今は汝を殺し  
重る怨を報ひ此陣中の諸將の心を晴さざれば己の劍を拔て斬んとせむ

暫時と這を衆將の止る今若趙常と斬玉の實は君命と矯  
抗の同且將趙常を殺さざりし陣營の中の拘留在此先備細  
二世皇帝へ奏聞喜怒を窺ひて後みこそ我々が安危存亡を  
定めんと議しける所陳豨へ再進進と出章邯に向つて曰  
けり趙高既の將軍の老少を捕へ獄の中の繫ぎ置き李斯の  
如く爲んとせり假令將軍大なる勲功を立玉ひしと誰か這を  
帝に奏して將軍の爲に一族の災を免れまひり其を計得ん  
免る此陣中の將卒秦の都へ歸りて身命を保ち國家の  
忠を全くする事難し不如早く趙常を斬て志を安玉へと  
頻り説きも章邯へ流石の秦の旧臣の二代も續く名家の  
火急に反くも本意をくむと尚も猶豫して爰を更むこと



空しく日と經る折節の趙の大將陳餘が方より使を達て書を送り來りけしべ何事やらんと急ぎ其書を開き見るふ其文の曰

白起の爲秦將南并鄢郢北阮馬服攻城略地不可勝計而卒賜死蒙恬爲秦將北逐戎人開榆中地數千里竟斬陽周何者功の秦不能封因以法誅之今將軍爲秦將三歲矣所亡失已十萬數而諸侯並起茲益益彼趙高素諛日久今事急亦恐二世誅之故欲下以法誅將軍以塞責使人更代以脫其禍將軍居外久矣内隙有功亦誅亡功亦誅且天之亡秦無愚智皆知之今將軍内不

能直諫外爲亡國之將孤立而欲長存豈不復哉將軍何不退兵與諸侯爲從南面稱孤孰與身伏斧質妻子爲戮乎陳餘百拜謹書

章邯を讀了諸大將の曰けり陳餘が言も一理あり我何處の身を寄てこの禍を免さん陳豨もつち回答して今諸侯志多秦の背き六國の子孫も自立各々國の威を振へど皆孤疑を抱くと以て行て服する者少し惟楚の項羽ハ功烈も當時を震動して七氣節天下を蓋て其將は猛く兵強し此故を以て大國の諸侯と見し時膝他日の秦の國を滅する者は是らるるを楚するべし今其將軍楚の降らる他日も王侯の富貴の到るべしと云は章邯の眉を顫りて我往日彼が季父の

繪本漢書卷之六

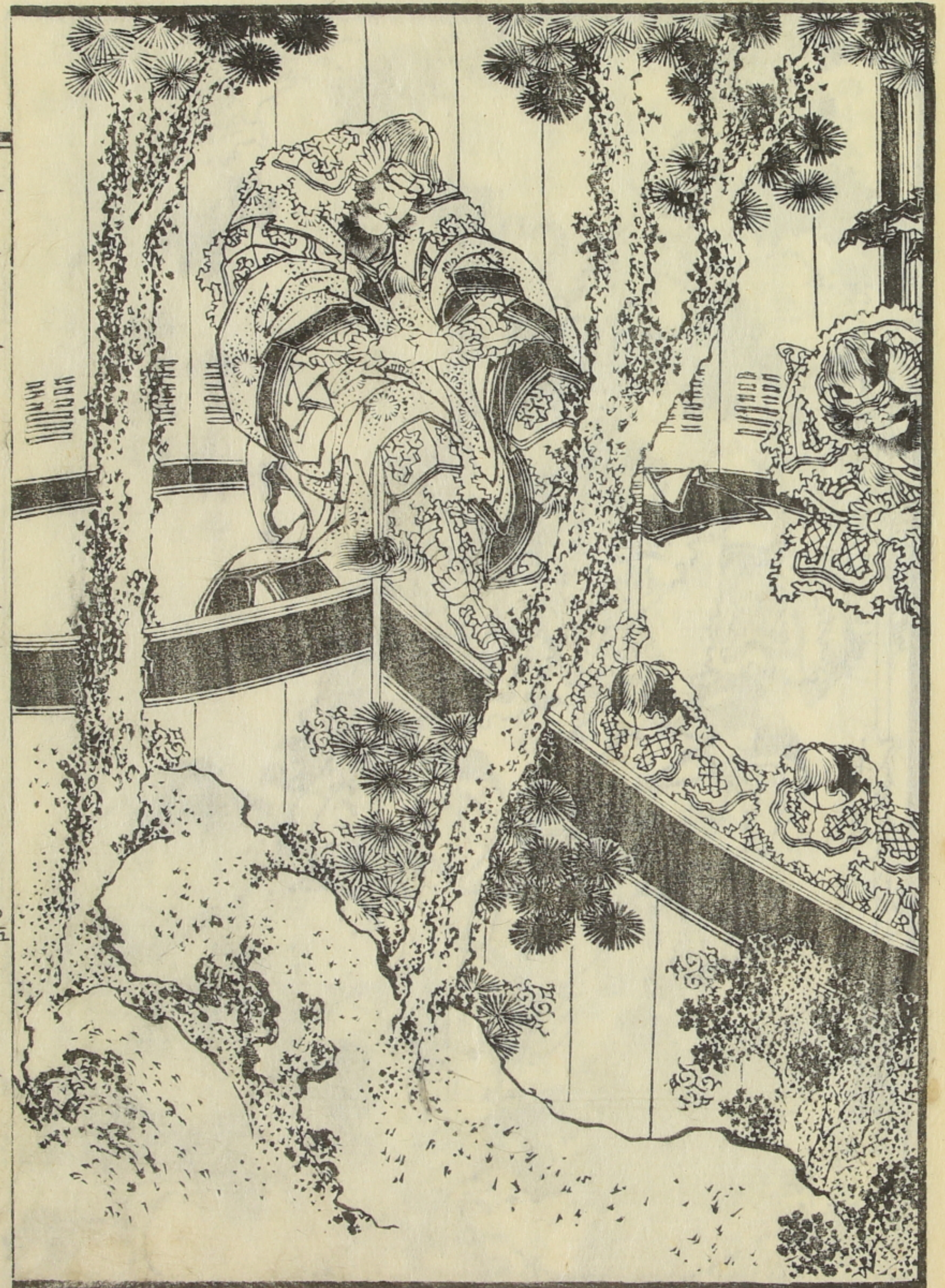


項梁を殺し、楚と累世の讐あり。豈能く我を用ひべき。心孤疑して災をもぎ。此時陳豨がまこと云や。我よく將軍の爲に楚の軍中の使ひして。項羽の爲に便利を説き定めて。其愛の従ふべし。足下多らむ我つるを候王へと陳豨の遂に一匹の馬の衆り。楚の陣營へ到りては。我の秦の國の使者陳豨とやを者り。願くは元師の見へて言上を辭ありと云へば。即ち是を項羽の傳報す。項羽の聞て直る進來へと仰り。陳豨は項羽を拜し畢まば。項羽は久く納命のよともなく。此度營來りぬるは。汝何の説客るぞ。と問ふ。陳豨が答ては。兩軍互に相對し。勢力とも困る。勞と費用日々此くも。士卒も百姓も疲敝し。惟秦の

爲に利ありとせむ。亦楚の爲に利あり。と云ふ。項羽問て言ひけるは。さきまは再りぬるや。陳豨答て云ひけるは。章邯の三年以來、勞苦して自ら數度の戦も。千辛万苦を尽せども。秦の趙高の是を救ひ。兵と持ども。其切少くも。あつた。是ぞ。目今秦の勅使を捕へ命を枕て首を斬り。願くは將軍の從ひ奉り。共の霸王の業をなさんと。思ふ事。赤子の父母を慕ふ。如し。將軍用ひて。項羽の前なる案を。とと拍章邯に。我季父を殺す。千載の恨も。百世の仇。我其首を打碎き。溺器とせし。み。日比の恨も。雪ぐんと。争り降を許さんや。陳豨あまを打聞て。只冷笑ひ居る。項羽よく怒り。汝何を。冷笑するぞ。室劍を。あつとんと。欲する。陳豨面を正しく。志て我



將軍の所爲を見聞まるは是れ事こと小こし失しふ所ところ大おほる事こと也なり  
 思おもふに笑わらふ而已のみ夫その大丈夫たいぢゆうの爲ため國くに不おぼ忘わす家かて賢けんを用もちひ先まの  
 章あきら邯かが定てい陶たう不ふ將軍かうじんの季あぢ父ちと殺ころせし各おの々おの君きみの爲ため不おぼる  
 是こゝろ人心にんしんの忠ちゆうみして智ちゆる人ひとの志しを取と將軍かうじん何なにぞ拘こ滞ちして  
 其その度量どくりきゆうの廣ひろくさるや項かう羽うの猶なほ怒いかりて已やまらば范はん增そう進しんに  
 曰いひけるは志しをさるく陳ちん稀きを避さ玉ぎよくへ某その人ひとの事ことありと密ひそ々ひそに  
 志しを耳みみ語かたバ項かう羽うまゐら陳ちん稀きの向むかひ汝なんぢ暫しば時しば外ぐわい席せきの  
 出いよ我われよく是こゝろと思おもふ案あんして其その後あと事ことを變かはるべしと陳ちん稀きを  
 客きやく舎しゃの管くだ待まちしむ其その後あと范はん增そう曰いひけるは將軍かうじんの勢せい大おほるを  
 兩りゆう陣じん久くく相あ對たいして函くわん谷こく関かんと超こ難がたき章あきら邯かが能よく秦しんの藩はん  
 籬きりとさる志しを防かぎぐの故ゆゑなりと今いま章あきら邯かハ趙ちゆう高かうの諂せんせりて其その一いつ族しやく





秦の諸軍  
楚の頂羽小  
降る



獄の中囚且て其身も己の死を賜ふ進まを往る所なく退きを歸る所なく止  
まをば楚の降る將軍蓄き仇を念ると思義を以て心を結び用ひて部  
將とあるの彼深恩を感下り將軍の爲に一命を棄火と踏湯ふ赴とも  
竟る將軍の背まは況て秦の特とまらん只は章邯一人の章邯味  
方の歸伏共誰る秦の爲の守らんや藩籬撤して國の特重とまらん  
るく國の主將のた時におまを屈國とやあり將軍其屈の衆ト玉ひ  
長く驅つ大の進まへ秦の國を破らんこと又掌の中のみん今その降を許  
さる章邯必も他へ降りて又其君と相援け却て楚國の敵と下り  
らんぬ秦の國亡滅びざりては固の秦を増と云らべし古人も曾て申  
さるや三軍の互易はくして一將の難求天の與と不取へ反て受其咎と云ら  
るは私の仇と忘る速まを交へ玉つ実の天下の真家傑せん項羽之を打聞て



軍師のこゝろ定然り確論と喜て陣稀とせり曰けり我よく汝の言を  
 思ふ始章邯我季父を殺せし讎言いつて降るを容さるけり國家の爲  
 小人と用ゆる舊き恨を惜まざると季父の讎言と思ひし我一人の私國  
 家の爲小用ゆるを天下の公より豈と區々する讎言と思ひ人を用ゆるの大  
 公を忘れんや章邯果して実心の公舊怒とらち捨て來りて我を降れり  
 速ふ秦の使者を切て人馬を統領漳南の赴けり他日秦を滅せ後其  
 功勲を建立するへ富貴を共ふるを速く歸て言傳よ陣稀命を領了  
 拜辞より右の趣告けり章邯尚も心疑ひ我今足下の薦めより勅使を  
 斬て楚の陣の降らまわし思へども范增もとより謀圖深し詐りて  
 欺きしを擒とみし殺さんと巧や否やも不圖足下再び彼所行能詳の  
 虚実を探し陣稀此事許諾せし楚の陣の赴き項羽の見て叔云章

邯尚も將軍の舊き怨を忘らざり欺き寄て害せん自ら陷穽の投るを  
 やと心疑ひ恐る。輕き一々の來らんと。言今項羽の面を正し夫大丈夫の  
 一言の泰山よりも猶重し我章邯を殺さん。別の計畧もらんや荀欺て  
 殺し。此後來り降るもの昔章邯を以て藉口と爲。まづ賢者の路を  
 塞ぐとのみのり。あまを見よと。箭を折て乃ち誓をりけり。陣稀其  
 箭を携て亟谷關の馳回り項羽が詐りる由を備ふ語ま。章邯の始て  
 心打解て叔趙常を引出し忽ちま。頸を刎諸將と共に十萬の勢を  
 卒してあま。亟谷關を引拂ひ漳南の陣を三十里隔て兵を留め。あま  
 自ら秦の諸大將數十人を伴ひ。楚の陣門の降りけり。范増下知を傳  
 て。楚の軍勢の隊伍を整し。旌旗を排列。武器を揃へ威儀を十分盛  
 小一叔三通の鼓を打。轅門を開し。章邯以下の内。入地の拜伏し。涙を



流し項羽の告て云けり我等趙高が讒のより二世皇帝の救兵を討せむ。却て詔書を下し。皆我輩の死を賜ひ一族妻子の獄あり。進退歸き。所なく。今將軍の降まらば嬰兒の父母を望が如し。但し昔日定陶の上將軍の尊叔を害し。其罪は万死に似たり。猶輕し。然るに全く寛宥の恩を蒙り。まらるる夏天地よりもの深し。願ふに命を奉る。上とて將軍を不殺の恩を報ふ。下とて三族の屈死の仇を雪さん。幸ひに我言を記録す。驅使の任んと言けし。項羽は大喜ひて。章邯等を安撫して。兩軍を既一命を我の歸せ。我今も重んず。重用へ。忠心を抽で。國家の功を顕せ。他日の秦を滅さば。爾と富貴を共せん。と酒宴を設け。持成ける。今程は。函谷關を守らる。秦の大將より。馬を馳し。咸陽へ。叔も大將章邯へ。勅使を殺し。十万の勢を牽て。楚の降り。項羽と力を合せ。函谷關を攻んとす。事

已の急急と報うけし。趙高の牙を呀て怒る。二世皇帝の見る。臣章邯等。毎常の謀反の心あり。と。奏し。まらる。陛下の急の勅。断ま。玉の。今果して然り。と。是十万の勢を牽て。楚の降り。京師を攻んと欲。まらると言上。二世皇帝大に怒り。玉ひり。遂に楚の降まらる。人々等が妻。子老少を引出し。咸陽の市の夷けり。却有人ある。支を章邯等。傳報せ。けし。皆諸共の聲を與。卒も候。去來や漳河を殺過。新安渑池を。函谷關を守らる。主將も士卒も。去來や漳河を殺過。新安渑池を。攻取て。函谷關の。入玉へ。項羽の。打聞て。軍師范增。謀謀。范增。回。答。曰。けり。大軍久し。野戦し。人馬勞れて。財足ら。まの頃。懷王。彭城へ。遷。都成せ玉へ。百事猶。調。況て。秦の兵強。國豊。民富。り。輕。見。不如。彭城へ。御。回。後事云々。懷



王の秦と本と固し人馬の氣力を養ひて兵糧馬秣を貯へる東西より  
 きて攻上敵の前後を顧る閑隙はらざるまひべらる今余せむと輕  
 進んで攻る而已のし。彭城を龍表する勞して無功のるるを却て威名を損  
 べ。項羽此義を最もとて御方の勢を引具しと叔彭城へ回來り秦の降人を  
 伴ひて懷王の見へりけり。懷王時の宜ふ將軍師を出してより累功を  
 立ちしころ。おもむき金石の銘とて千載の後傳べしと酒宴を設け喜  
 玉の諸大將の恩賞なり項羽を魯公の封し玉の劉邦を沛公とすこの  
 時沛公劉邦は南陽郡を攻靡り四方の賢士を招きけり部下へ加る大  
 將の蕭何。樊噲。曹參。周勃。王陵。夏侯嬰。柴武。靳歙。盧楨。丁  
 復。周昌。傅寬。薛歐。陳沛。張倉。任敖等を先とて大將其員五十  
 餘員兵十萬ふ及びけり魯公項羽が手下の范增。英布。鍾離昧。桓

楚。干英。丁公。雍齒。章邯。司馬欣。董翳。魏豹。張耳。陳餘。共  
 敖。臧荼。龍沮等を先とて大將の百十餘人五十萬騎の餘りけり。余れ  
 ども項羽性質只殺伐を專とす。仁愛薄く有るる勢ひ甚盛なれど  
 百姓服さるる。又沛公の專に仁義を以て殺伐を尚ひて廣く英  
 雄を攬民百姓を撫安けり。懷王深く愛玉の常の群臣の宜ふ劉  
 邦天性寛仁と有徳長者と云ふべし。若此人の征伐を掌職しやん  
 ぬ能郡國を撫輯且万民を安泰せん魯公項羽の其威勢極て猛烈  
 盛るる天下の諸侯も憚りて面を見る者なけれども其性暴く剛けれ  
 ば朕も怖ろしと宣ひて項羽が支を奏す時御座を起せ玉ひけり。余程の楚の細作  
 咸陽城より馳回り二世暴虐を放り趙高安ん人を害し百姓怨み皆  
 けりと告まへ項羽へ此旨を懷王の奏し臣日久く兵を養ひ軍馬の銳

九



氣精熟せり。秦を滅べし。民を救ふ時。己の重宝を以て進發せんとし。懐王聞せ玉の。朕卿と劉邦と命を下して二軍と。秦を伐んと思ひ。沛公進發せんと云は是能我意の合ふと。又沛公を召れ。秦の無道極む。天下の民を虐使せり。故に天人共怒る。速に是を誅伐して太平の化を致さ。卿等二人の勢に等し。今秦を攻る。西と東と路を分り。二陣に分れ發向せ。東西の路の遠近の異なる有やと。群臣の問せ玉。秦の樣二條の路の遠近の異なる。遠近難易を分る。二人の間を取ら。西と東を分玉。懐王此義を志ると。東西二字を書せ。二人の間を拈り。沛公も西の當り。項羽東の當り。今西將謹で命を受。人馬を整點吉日を擇びて啓行と。時又懐王の宣ふ。卿等秦の無道。民を悩む。我を立て楚王と。人の望む。從ひ。我は素より

身も弱く才劣り。民の望を塞ぐ。足らざる。今卿等二人の中。秦を攻て誰を先。咸陽に至る者と。王と。後咸陽に至る者と。臣と。せん。吾此約の背くべし。今天下定ら。閑散地の朕を置安く。病を養ひ。乃ち吾願ありと。仰ける。沛公并小衆將。皆地上の拜伏。臣等心を王事。早く帝業を創立して。長安の都として。周の舊の復さん。より臣等の志ありと。答まると。打立。定陶のし。物を調へ。分て兄弟の約を。項羽を兄と。沛公を弟と。酒宴を。諸軍勢を。次の日路を。西と東へ。進發せし。

第十四回

沛公為謀王德得卿生

話說二世皇帝の三年春二月。劉沛公は十万余騎。彭城を打。先昌邑に到り。城門堅く鎖。数千の兵要害を支へて。あまを



防ぎし。參乘樊噲を見破らんと罵る。沛公制して曰く。假令緊く守るとも我踏破りて通らんこと玉石瓦  
解如くらん。今強暴を約る王者の師と云ふべし。兵を推して進まれを城  
大軍一度の攻く。滿城忽ち粉ふるん。我軍を用る。素より民を  
救ふの。今強暴を約る王者の師と云ふべし。兵を推して進まれを城  
中の民を聞我輩秦の計法。常水火の中居て苦し。思ひを  
做せし。今沛公の大軍に向ふ所。服して百姓を待た。時雨の降る  
如し。若くは敵まる時。天の逆ふ。沛公怒りて城を攻  
破らんと必せり。城を開きて降らんと。路の香花を具。門を開きて  
迎ふ。沛公即ち城の人民を安んじ。令を出し。部下の勢を戒めて。漫小民の  
物を取。首を刎んと。下知せらる。百姓の。息を感。遠近風を望んで

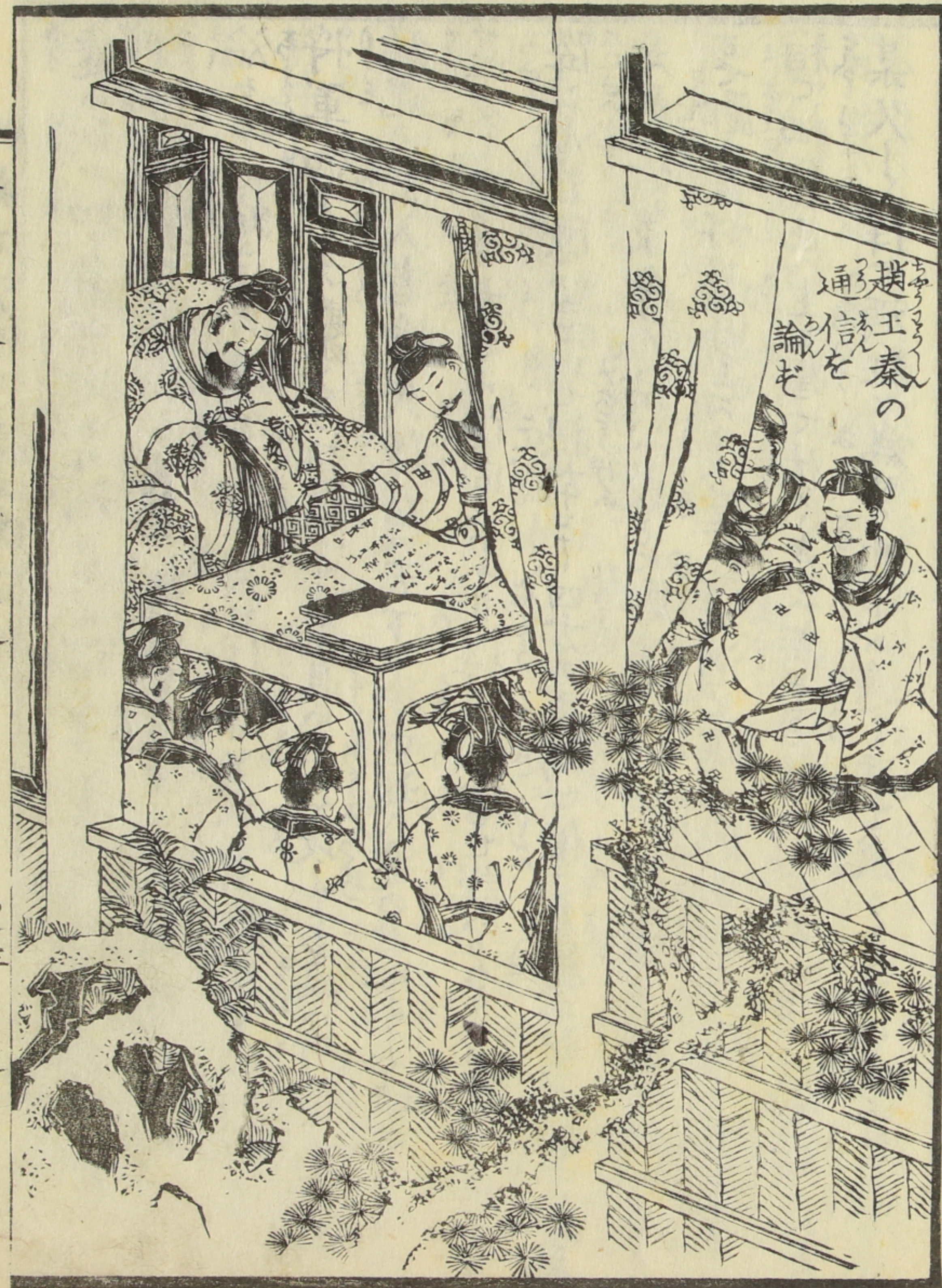
降り。又血を。向ふ所皆と。服し。兵と高陽の進む。遠  
近を傳播する。沛公の郡邑。秋毫一ツも。各處歸附し。う  
ける。其邑勝數も。尽す。一日も。高陽の至り。高陽の邑令  
王徳城を出て。遠く沛公を迎へける。沛公其人を見。語言精爽。一七  
器宇衆を出ら。因て城の入り。延坐せし。既の降歎の意あり。何ぞ我の  
従ひて。一同秦を伐て。共の國事を議さる。王徳手を拱。さ。將軍の  
帳下の従はん。其の志。小臣素より。將軍の幕下の屬人と欲。今  
今所を去。時。高陽を治る者。蒼生の望を失。今。里の  
酈食其。一箇の賢士候。家食。酒を好。酔る時。高  
小節の拘ら。縦の動作。人皆狂人。云。今年齡六十八。歳。外  
外貌の取。足ら。胸中の。萬斛の珠璣。貯へ。腹内。一天の



星斗と羅て興衰の運を知り又よく治乱の機を藏も真の希世賢士  
 多。始皇の書を焚儒を坑の黙首を虐使をも見て酒を嗜て伴の  
 狂人とする者もらん。常人の語りと曰われ終日の昏醉も若こそ  
 明主の遇時の必き醒んと將軍彼を用ひ多の朝夕更を謀り至り大なる  
 益多しむるや沛公大ひの喜びて叔王徳と使とし。あまを招かざるの  
 酈生病酒醒を一夜を被て出て對面を王徳をさうの沛公の寛仁  
 大度を構し。某己の先生を劉沛公の薦まの沛公を喜びて今  
 某の先生を迎ひ來まこと命ぜらる。先生久しく大才を抱ひて真主の遇  
 玉の沛公へこそ有徳の君とわれれば後竟の王業を玉ふべし速  
 くも出て仕玉へ酈生回答て我曾て劉沛公へ大度のほど賢を侮る人  
 聞り。今礼を以て迎へぬ道と狂て從つ。辱りも取ねぬ王徳をさねて

曰ける。左のひらき左のひらき先生素より機変の通を以て對面  
 上左も右も試玉へ酈生再も同伴て劉沛公の陣來る此時境  
 沛公の末の腰打掛らして二人の女小足を洗へせ居らま。程の酈生内  
 入つ長揖し七拜を言ていり。足下の秦を助けま。諸侯を攻んと欲さる  
 又諸侯を從へて秦を攻んと為らるると慢侮し云けま。沛公酈生の  
 老聃且言語の遠峻も是と罵て以豎儒能聞よ天下の兆民悉く  
 秦の苛法も苦むる。我懷王の命を受西の路より秦を伐天下の爲め  
 無道を除く。何と秦を助けま。酈生曰へ余らん。秦を伐て無道を誅し  
 義兵を揚て天が下を服せしむん。然らば何ぞ足を洗ひ居り。長者  
 見るや毎常此の如くせ。賢徳の人離れ去り。足下誰とあまを圖ん。於是  
 沛公へ足を洗ふを輟て衣を撰へ酈生を引て上坐せし謝し曰適來と







遠の到を知らざりし。出迎ふの礼を失ふ。深くは怪まれ。於是酈生の  
 縦横揣摩の説を以て。秦の無道を言ふ。其辨懸河の如く。ゆ  
 滔々と絶えず。沛公喜ひ。秦を伐謀を求る。酈生又合て曰く。今  
 將軍四方より聚る。勢十萬を直ひ。秦を攻んと。此所謂羊を引  
 猛虎の口に入る者。夫陳留へ天下の街四通八達。土地は城中の貯へ  
 甚。見今太守へ陳同といふ。其行て利害を説く。来りて御方  
 降らん。若陳留を以て根本と。四方の軍馬を催さ。機小衆を關中を破  
 是最上の策。沛公最と酈生を陳留の城へ遣さ。太守陳同素り  
 酈生と好む。後堂へ酒を進む。酈生説て云く。良禽木を  
 相て栖賢臣へ主を擇て佐く。秦へ無道と縦ひ。天下の諸侯悉叛。起  
 某久く佯て酒狂を爲す。其中の遍く君を求る。意合ふ君無り。

昨日沛公を見し。隆準龍顏。豁達大度。仁義の師を行ひて。寛厚の徳を施す。  
 今西の方秦を伐む。郡邑風を望て。伏して太守今を孤城を守り。衝要の地  
 當る。沛公の兵寄來ら。只一鼓にして破らん。今太守は徒の頸を  
 延て死を受ふ。此機會を失ふ。甚惜。疾心中の變断して。其身を全  
 至陳同と打聞て。首を低て沈吟。先生の言理を以て。秦の祿を  
 食ふ。故に叛く。忍びて酈生を殺す。曰く。二世皇帝は殘暴  
 天が下の人齒を切ら。昔武王の紂を伐て。四海の中悦服。今に至りて  
 世の中の獨夫の紂を誅すと。聞君を殺す。あを不聞。二世へ今時の獨夫  
 の君を叛んと。言へ陳同打聞て。心を變。降参。城を闚て迎ふ。沛公  
 蕭何曹參等の百十人。城中に入り。民を撫。一月余り逗留。諸方の勢を  
 招く。新の五萬の勢を以て。沛公深く喜ひて。先生の會より。以來



陳留王下士卒と招き糧儲と積む。是不朽の功ありと遂に封じて  
 廣野君と名けり。常は左右に居らりて計を問ふ。時、酈生申  
 けり。臣將軍の息を蒙り日くはと相親む。今も奇功ありと  
 願ふ。秦を破るべき補佐の臣を薦まん。此所、一箇の賢士のり。徑濟の  
 才超人。殷湯の如く伊尹の如く。周武の如く呂望の如く。若る人  
 破る難きを沛公喜望を起て如何人ぞと問へり。酈生答て曰ひ  
 けり。姓は張氏。其名は良字は子房と。韓の仕て累代宰相  
 世家より嘗て異人の術を以て常は秦を滅して韓の仇を報へんと。今  
 韓國新の事。何事も調へね。輕々しくいふと。彼今君の仕へる天  
 下の堂中ののり。沛公を聞玉の張良已の韓の仕へる如何と  
 從へん。酈生答て我己の計を設てれ。欺き寄て見へる。君其時の美

言を以て挑む王の彼を來りて御方の事ある。君試む書を造り。今  
 兵を率秦を伐六國の爲の仇を報ひ民の塗炭を救へん。軍中の糧  
 乏して急に進む。今同盟の好きを以て糧五萬石借玉へと云ふ。王  
 韓國新の立て糧少く。答へ様無の張良を志謝せし。今  
 時へ事成り。沛公此義の從ひて。即時の書簡を調へて酈生を以て使とし。  
 韓の國を遣はる。韓王を問ひ見る。其書曰  
 楚征西大將軍沛公。劉邦奉書韓王殿下。伏以始皇無道  
 并吞六國。二世殘暴。罪惡貫盈。百姓嗷々。恨入骨髓。  
 今統大軍布告天下。伏義除殘。以雪世念。但兵行  
 百里。日費萬金。所少者。但軍需耳。鄰近郡邑。十實九  
 空。無處假貸。敬遣使酈食其。借糧五萬石。破秦之後



加倍奉償幸念征討之公非為私費登賜發下以  
濟急用雖無兵馬之助寔得生民之天臨楮懇切  
万惟無照不宣

韓王よまを<sup>見</sup>了て<sup>臣</sup>下め<sup>向</sup>て<sup>云</sup>けり<sup>我</sup>國一旦<sup>秦</sup>の爲め<sup>滅</sup>せらるる  
たる<sup>後</sup>めし<sup>今</sup>新く<sup>立</sup>たり<sup>ども</sup>貯置<sup>一</sup>物きて<sup>國</sup>の用も<sup>猶</sup>足  
らむ<sup>他</sup>人を<sup>救</sup>ふ暇<sup>ゆ</sup>らん<sup>郡</sup>臣<sup>答</sup>て<sup>曰</sup>けり<sup>沛</sup>公へ<sup>今</sup>懷<sup>王</sup>の<sup>勅</sup>命<sup>を</sup>  
受<sup>兵</sup>を<sup>發</sup>し<sup>暴</sup>秦<sup>を</sup>伐<sup>へ</sup>大<sup>義</sup>あり<sup>今</sup>是<sup>糧</sup>を<sup>借</sup>ん<sup>と</sup>り<sup>先</sup>の<sup>望</sup>の  
半<sup>を</sup>與<sup>へ</sup>好<sup>ま</sup>を<sup>全</sup>く<sup>去</sup>玉<sup>へ</sup>然<sup>ら</sup>む<sup>ん</sup>べ<sup>怒</sup>ら<sup>る</sup>る<sup>大</sup>義<sup>を</sup>傷<sup>り</sup>玉<sup>ふ</sup>  
韓<sup>王</sup>案<sup>し</sup>煩<sup>ふ</sup>張<sup>良</sup>の<sup>問</sup>玉<sup>の</sup>張<sup>良</sup>ま<sup>な</sup>ら<sup>答</sup>ゆ<sup>ん</sup>先<sup>快</sup>く  
沛<sup>公</sup>の<sup>來</sup>使<sup>を</sup>官<sup>待</sup>玉<sup>へ</sup>某<sup>自</sup>ら<sup>沛</sup>公<sup>の</sup>見<sup>へ</sup>て<sup>糧</sup>を<sup>實</sup>を<sup>生</sup>見<sup>韓</sup>  
王<sup>喜</sup>び<sup>て</sup>汝<sup>よ</sup>く<sup>詞</sup>を<sup>巧</sup>而<sup>國</sup>の<sup>好</sup>ま<sup>を</sup>失<sup>ふ</sup>ま<sup>哀</sup>む<sup>れ</sup>酈<sup>生</sup>ま<sup>を</sup>打<sup>聞</sup>て

計議成さりと喜びし此<sup>支</sup>兼<sup>て</sup>沛<sup>公</sup>と<sup>合</sup>圖<sup>を</sup>定<sup>ち</sup>置<sup>き</sup>相<sup>伴</sup>ふ<sup>て</sup>來<sup>り</sup>  
けり<sup>張</sup>良<sup>路</sup>を<sup>酈</sup>生<sup>が</sup>容<sup>體</sup>を<sup>考</sup>ふ<sup>ん</sup>此<sup>者</sup>糧<sup>を</sup>借<sup>ん</sup>と<sup>り</sup>假<sup>の</sup>設<sup>け</sup>  
計<sup>畧</sup>の<sup>實</sup>れ<sup>我</sup>を<sup>沛</sup>公<sup>の</sup>從<sup>へ</sup>り<sup>諸</sup>共<sup>の</sup>秦<sup>を</sup>伐<sup>ん</sup>と<sup>欲</sup>む<sup>ん</sup>と<sup>心</sup>中<sup>の</sup>  
悟<sup>け</sup>し<sup>直</sup>進<sup>ん</sup>と<sup>轅</sup>門<sup>へ</sup>入<sup>ん</sup>と<sup>欲</sup>む<sup>ん</sup>其<sup>時</sup>の<sup>參</sup>乘<sup>樊</sup>噲<sup>出</sup>迎<sup>へ</sup>謹<sup>に</sup>  
禮<sup>を</sup>施<sup>せ</sup>張<sup>良</sup>見<sup>や</sup>て<sup>一</sup>開<sup>國</sup>の<sup>功</sup>臣<sup>の</sup>と<sup>敬</sup>ま<sup>ら</sup>る<sup>と</sup>塞<sup>門</sup>ま<sup>到</sup>り  
けり<sup>沛</sup>公<sup>の</sup>名<sup>此</sup>所<sup>へ</sup>蕭<sup>何</sup>曹<sup>參</sup>滕<sup>公</sup>王<sup>陵</sup>是<sup>等</sup>を<sup>引</sup>て<sup>迎</sup>へ<sup>玉</sup>張<sup>良</sup>  
乃<sup>ち</sup>ま<sup>を</sup>見<sup>る</sup>沛<sup>公</sup>隆<sup>準</sup>龍<sup>顏</sup>の<sup>治</sup>國<sup>安</sup>邦<sup>の</sup>真<sup>君</sup>ま<sup>相</sup>從<sup>へ</sup>る  
蕭<sup>何</sup>等<sup>も</sup>開<sup>疆</sup>展<sup>土</sup>の<sup>元</sup>勲<sup>を</sup>思<sup>ひ</sup>て<sup>歎</sup>と<sup>一</sup>代<sup>の</sup>君<sup>の</sup>時<sup>の</sup>必<sup>し</sup>  
又<sup>一</sup>代<sup>の</sup>臣<sup>の</sup>と<sup>云</sup>ふ<sup>心</sup>の<sup>思</sup>ふ<sup>め</sup>我<sup>今</sup>言<sup>を</sup>巧<sup>ま</sup>し<sup>説</sup>お<sup>し</sup>せん<sup>と</sup>思<sup>ひ</sup>  
豈<sup>圖</sup>ん<sup>や</sup>是<sup>を</sup>黄<sup>石</sup>公<sup>が</sup>分<sup>付</sup>る<sup>真</sup>の<sup>君</sup>と<sup>相</sup>扶<sup>け</sup>名<sup>を</sup>萬<sup>世</sup>の<sup>傳</sup>へ  
よ<sup>教</sup>へ<sup>辞</sup>め<sup>應</sup>じ<sup>今</sup>沛<sup>公</sup>の<sup>遇</sup>へ<sup>る</sup>と<sup>直</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>と</sup>地<sup>の</sup>拜<sup>伏</sup>



志に見る。沛公を中帳の迎入て持成ける。其時張良云ひく。今  
 將軍の兵を牽秦の無道を伐玉ふ諸國の勢も來服して兵糧馬秣の  
 不足なり。其を如何せん。狂人の言を信じて韓王の糧と詐張良を招き  
 寄んと去玉ふ沛公の一言の駭愕て何の答もつらう。蕭何側  
 のて云けり。我君糧を借んと言ひ原先生を借ん爲り。先生と來ま  
 り。我君を見て説爲らん。先生來り説んとて却説と能はざる者  
 我君を見て心中の必と思ふ事のみ。今我君と往昔の博浪沙の車を  
 撃し。蒼海公とを校べ。豈但百倍のさうらんや。今我君の從つて韓の仇  
 秦の報つて功業ありて自其志を遂つらん。張良地上の拜伏し。我心中の  
 悉く己の足下の見らるる。我如何の。韓の爲の秦の怨を報へんと  
 今沛公從ひてを伐の如事なり。今も此支韓王の告過知らせ度

好く隨行せん。沛公大喜。て介て次日の物軍勢。陳留の城を離れ。韓の  
 國へと啓行けり。此由韓公間傳へ自遠く出迎へ。沛公軍を外留り。鄴生張  
 良蕭何樊噲等。只百余騎を引具て。韓の城の入り。韓王酒宴を設け。  
 將軍秦を伐んと。仁義の軍を起さる。適の使を馳らして糧を求らる。  
 且ども。新の立。我國の多貯と。ても夏らね。命の應ざる能はざり。昨日張良を  
 差して謝罪する。願へ將軍推察せよ。沛公聞て答ひ。王の國用  
 欠し。を知らず。何ぞ借らんや。今張良の計策よく。軍務の事。長く。我此  
 人を假受て我及びねを補助し。秦を伐んと存ざらる。必だ長く留まら  
 ず。秦滅びる。歸らん。韓王を打聞て我張良の計時。離る。是を借ら  
 ざり。但將軍秦の無道を滅まら。軍を助けあらんと。是を借ら  
 せん。必だ約を違はざ。秦滅びて後。甲玉沛公喜び拜謝して張良を伴ひ





稀世の勇將  
沛公の先將  
数人と戦ふ





出行けり。是よりあての張良と食さる時、泉をるべ寐る時、床を並ぶ。却説張良へ沛公は彼六韜三略を細與開陳さる。隨問隨答といふ。然とて一字も通ぜざるありけり。余は張良敬馬さる。我の昔石公が教と受て世の人とあはれを講論する。茫然とて知る者あり。今沛公と物語の文義通達滞礙らむ。曾就り講究過ぐる。一般の某數年よく讀て熟きとらむ。沛公の明白なるに及ぶ。聰明仁智天より授り人力を假なき。知り玉ふ真の英明仁智の主なり。と自暗し喜ひけり。余程の魯公項羽の五十万の勢を牽ひ東の方の路條より進んで秦を伐けり。攻る取む。ぎとの入る。戦ひの勝むとの入る。在々處處を放火して。滿城一時の血を流し。殺伐の事を言とて。殘日暮秦と異なり。仁恕の心無ゆ。天下望を失ふ。生民悉く逃くる。范增あはれを諫む。項羽用ひ心の俣ふ。

殘日暮の事を行へ部下の諸將も是非なく。猛威の畏は従へ。皆安んず。思ひけり。余は沛公の到る所民を恤し惠まれ。諸軍勢の令り。秋毫も犯さず。只仁徳を布る。人民心悅服して。草食壺將水し迎へけり。大軍路の滞らむ。己の武關の近づけ。一軍路を遮りて。一人の大將大音上げ沛公の遇て一言せん。傳寛傳弼をを見て。二人馬を乗出し。二十餘合戦ひ。彼大將の奮戦し。傳寛を活捕。傳弼を散々の打破り。又大音の呼り。我沛公の遇んと。他の意あり。今手下の三千の兵ある。部下の屬ん爲の。張良馬を進り。汝は如何る者。其姓名を聞んと。彼大將一向の只沛公の遇て。後我姓名を曰ん。の樊噲。大小腹を立。汝の名も。匹夫なり。又争り。我君の見ゆる。と。汝は早く我戦を。試よ。と。打て。蒐れ。迎合十合の。戦ふ。勝負の。不も。変せ。ね。



沛公門旗のうらふ他が見んと求むるの最悞小し且又武藝も衆出ねば  
沛公一匹の馬を乗り身を挺て陣上の至り問て曰ける壯士我の遇んとす  
何の指教のや只見那人沛公の如此の容儀を見て馬鞍の上より滾下り  
地上にたふさふと拜伏し某此地のゆりとり日久く真君を仰ぐ今始  
御見面仕る何の喜びのやと云ふ諸將と先刻對敵し我が武勇を  
試して我を留用玉の爲ぞ敢て天兵を批阻めんと無禮の罪のゆるさむ玉へと  
只慎まを居らうけり开も此人の誰を第七之卷の分解と讀て知るべし。

訂正 繪本漢楚軍談初輯卷之六  
補刻



